

Title	日常語からみた朝鮮文化：叙説
Sub Title	Korean culure as seen through everyday language (I)
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.430(17)- 446(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0446">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0446</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 日常語からみた朝鮮文化—叙説

野村伸一

はじめに

ことばは文化である。しかし、文化がすべてことばに表現されているかという、決してそんなことはない。同時にまたことばに現れた「文化」というものも、これをどういう視角からみるかで、独自のものか、かなり普遍的なものか、あるいは独自にみえるが実は近隣の文化と根を同じくしているかなど様相を異にする。

たとえば、日本文化論のほうでいえば、「たてまえと本音」「根回し」「気」「甘え」などを取り上げ、それらが欧米の語に置き換えにくいことから、「独自の文化」の指標であるかのごとく考える者が多い。確かに、「たてまえと本音」を使い分け、合議制のかたちを取りつつ、実は「根回し」によってことを裁いていくなどという習わし、あるいはそれに長じることが「人物」の証でもあるかのごとく受容されることなどは、特異な社会の断面を物語っている。

ところが、朝鮮語を通してみると、「気」や「甘え」は、それほど特異でもなくなる。

「気が死ぬ（기가 죽다）」すなわち「気が引ける・ひるむ」

「気を用いる（기를 쓰다）」すなわち「気張る」

「気が詰まる（기가 막히다）」すなわち「（良くも悪くも）呆れる」

などという表現があるし、また「母親に甘える」などというもの

<small>オモニエゲ</small>	<small>ワンソクブリダ</small>
어머니에게	응석부리다
<small>オモニエゲ</small>	<small>オリダワンブリダ</small>
어머니에게	어리광부리다

などと二通りにも表現することができる。もたろん、このことだけで、気や甘えが「日本文化」の一つの特徴的な表現だということが否定された

わけではない。これは単に同義語があるというだけのことで、それだけでは日本文化における「甘え」の位相と朝鮮文化における「<sup>ウソク</sup>음식(甘え)」「<sup>オリグワン</sup>어리광(甘え)」の位相とが対照されたわけではないからである。一方、百種類以上にはなろうとおもわれる日本語の「気」にまつわる慣用表現についても、そのすべてが朝鮮語に置き換わるわけではない<sup>(1)</sup>、また、みごとなパンソリの演戯に接したあとで、「気が詰まってなんともいえない(기가 막히다)」などという言い方は日本語にはない。つまり、「気」も日本の「気」と朝鮮の「気」ではズレがある。

以上のことからこういえるだろう。ことばは文化であるが、そこにみられる文化は近隣文化との「対照」という網の目を通さない限り、真面目を明らかにすることはできない。

さて、以下の小論で試みたことは、朝鮮語の日常表現のなかに脈絡の深い、しかも独特な「文化」を探ることである。簡単にいうと、日本語に置き換えられたとしても、位相が違うことば、あるいは訳語を欠くものなどを取り出し、その意味を探ることである。なお、資料は新聞と日常会話の用語を主とし、特殊な学術用語などは説明のついでにふれるばあいは取りあげていない。

この試みは文化の対照研究の叙説に当たる。いうまでもないが、カミ観念とか死生観、価値感また日常的な感情の類型、その他、無形の世界と深くかかわる領域の対照なくして、ある一つの「文化」を深く論じるなどということができるはずはない。このごとは日本文化についても朝鮮文化についてもいえるだろう。ただ、ここではできるかぎり、朝鮮文化の側に視野を限定して記そうとおもう。

## 1. イエをめぐることば

1991年の2月、山梨県の知事選挙のときのこと、中央政界の大立者が故郷に戻って応援に力を尽くしたものの、あえなく敗北した。その後日談なのであるが、東京にもどったとき、側近のひとりが「おやじさん、わたしがいったとおりになっちゃったね」「わかった。もうおやじさんいうな。過

ぎたことはしょうがない」などといってボスを慰めたという。

ここでいう「おやじさん」は明らかに、「一家」意識を反映したものである。なにもこの政治家に限らず、政界ではこうした言い方が好んで用いられる。ところで行動様式という点では、よく似た点の多い韓国政界でも、この「一家」意識は相当なものである。

1990年の秋、野党平民党の総裁が「地方自治選挙」の実施と内閣制への改憲の動きを阻止するために断食闘争を始めた。このとき与党の総務はこういって嘆いている。

「われわれが明けても暮れても、家内でもめているかのように（집안 싸움이나 하는 것처럼）みえるので、平民側が強攻に出てくるんじゃないか」

「まず家の中を治めてこそ（집안부터 정리가되야）、ことはうまくいくだろう<sup>(2)</sup>」と。

組織をイエ 집に見立てる意識は日本以上に根強く、ある面では「見立て」ではなく、真に家族的なつながりを確認しているかのようである。たとえば、極端な例であるが、教会に通う、まちの「おばさん」が「主なる神」のことを「アボジ（父）」と表現し、「アボジがいうんだから、きかなくちゃね」などとはなすのをきいたことがある。そうかとおもうと、国立大学の学生たちでさえ、級友など親しい関係では、一般に呼びかけるときに、

「兄さん（형または오빠）」：男からは형(님)といい、女からは오빠という。

「姉さん（누나または언니）」：男からは누나といい、女からは언니という。

という。一方、年上から年下へはだいたい、名字は付けずに、「泰浩（태호야）」「美淑（미숙아）」など、名前だけを呼ぶ。これまた典型的な家族間の呼び方である。

この家族的な呼称の習慣は、商店や中小企業の職場でも広くみられる。さすがに大企業や官庁などでは、男女の別なく「キム・テホ氏」「チェ・ミ

スク氏」などと呼びあうことが多くなっているようだが、基本的な人間関係はまだそう変化していないようである。<sup>(3)</sup>

一家意識ということでは、우리(われわれ)という語が広範囲に用いられることも注意すべきであろう。この語の多くは日本語「わが」の用法と対応する。すなわち、

우리나라(わが国)、우리회사(わが社)、우리집(わが家)、

우리선생님(わが師)

などである。ところが、

우리학교(わが校)、우리말(われらがことば)、우리아버지(うちの父)、우리동생(うちの弟)、우리형님(うちの兄)、우리사장(うちの社長)、우리것(わたしたちのもの)

などの例になると、「わが、うち」などの訳語でわかるように微妙にズレが生じる。

朝鮮語の習慣では、一つの共同体を形成すると、そこはかなり強い「우리우리」意識が生じ、同時にこの語が適用されるようである。従って、同じ教会に通う人どうしでは、「우리牧師さま 우리목사님」という表現も当然用いられる。Uriは日本語の「わが、われら、おらが、うち」に相当する語だといえるであろう。

ところで、ここで一つおもしろいことは、日本と同じく世間話に、さかんに「우리亭主」「우리嫁」「우리お父さん」「우리お母さん」「우리息子」という語が行き交うが、話手によってUriの語が無意識のうちに使い分けられているということである。女性や子供たちのぼあいは、日本語の「うちの～」と同じ感じで以上の語を用いるが、男が話し手のぼあい、妻のことを話題にして「우리마느라(Uriかみさん)」とはいわず、「내 마느라(おれの・かみさん)」という。<sup>(4)</sup> また、爺さんが嫁を「우리 며느리(우리嫁さん)」とはいわず、「우리 애(우리子供)」というのがふつうである。ただし、威厳ある家長といえども、自分の母親に対してはいくつになっても「우리お母さん」と呼ぶ。

この妻、嫁に対する呼称の使い分けは家父長制度の産物なのであろう

か。男にとって外から迎え入れた女性はなん年たってもウリ意識の対象とならないのであろうか。確かに前近代の社会において特に嫁の位置は不当に低く押えられていたことはよく知られている。それゆえ、男の側の優越意識が潜在的に働いて、妻に対してだけは一線を描すのだと、さしあたりは考えられるが、この解釈はどうも不安定である。というのはかつて、ソウルの両班の家庭では夫婦間で「반말 (そんざいなことば)」を用いなかったといわれている<sup>(5)</sup>からである。あるいはこれは結婚の習俗と関係するものであろうか。

## 2. 結婚を表すことば

「結婚する」に相当する日常表現には興味深いものがある。それは、男のばあい、「丈家に行く 장가 가다」といい、女のばあいは「嫁家に行く 시집가다」という言い方をすることなので、これは前代までの結婚のかたちをよく示してくれることばである。

とくに男性が「丈家 장가」に行くというのは、単に一、二度あいさつに行くということではなく、1年以上にもわたる「かよい」の行為を意味している<sup>(6)</sup>。それは1930年代まで実際にみられた習わしである。1979年に、慶尚北道高靈郡双林面安和洞という所で、「山神祭」関係の聞書を取ったことがあるが、その際、わたしは60代の農民、文相化さんからこんな話をきいた。すなわち若いころ、結婚の前には他の男と同じように、自分も「外洞」に住む16才のむすめのところにかよい、いくたびにせいぜいもてなされた、そして1年後に、自分の家に嫁として迎えてきたというのである。それがかつての「妻訪い」の名残であることは明らかである。このばあい妻の家は一種の見栄を張るのであり、資力があれば1年と限らず、もっと長くかよい、十分なもてなしをうけるのだともいった。

崔在錫氏は、朝鮮の婚姻史には、婿が婚家に留まる形が一貫してみられるというが、なるほどそうであれば、現今なお、若い男たちが、こんな安い月給では「丈家にもいけな」といって嘆くのもよく理解できるというものである。

ところで、崔氏の論文にも引用されているが、この妻訪いの原初的な私たちは高句麗の「婿屋」の制度にすではっきりと記されている。『三国志』魏志に記されたところを訓読すると、

婚姻を作<sup>な</sup>すに言語、己に定まれば、女家、小屋を大屋の後ろに作る。婿屋と名づく。婿、暮れに女家の戸外に至り、自ら名のり跪拝し、女の宿に就くを得ることを乞う。かくのごとくすること再三なれば、女の父母、すなわち聰<sup>さと</sup>りて、小屋に就きて中宿さす。傍らに錢帛<sup>せんぱく</sup>を頼<sup>たの</sup>つ、生子、己に長大に至れば、乃<sup>やが</sup>て婦<sup>おんな</sup>を將<sup>い</sup>て帰家す。

となる。

この記述のなかで、「錢帛を頼つ」とあるのは注目される。それは、現今なお、女性の側から驚くほど多額の現金あるいは家庭用品を持参することが習いで、男はそれこそ下着から礼服、家電製品まで用意されることにつながる。今風に考えれば、これは不合理な習わしのように見える。事実、核家族化時代の今、たてまえとしては「批判」の対象になっている。

しかし、現実にはなお「丈家」での婿もてなしは驚くほどである。古代の「錢帛」の風習がどこからきたのか定かではないが、考えられることはいくつかある。少なくとも、子が長ずるまでのあいだ（10年以上と考えるのが妥当であろう）男はかよってきて、飲み食いだけするわけではなかったろう。すなわちそれは婿にとっても気骨の折れる期間であり、具体的には労働を提供したのである。とすると、丈家での款待は合理的な行為だったといえよう。

さらにここにもう一つ想定すべきことは、朝鮮民族における「まれびと款待」の心意である。日本に優るとも劣らぬほどに「まれびと」はもてなされる。それは歴史を一貫してみられる民俗であり、また大衆化したミロク信仰（朝鮮民族に特有の現世的な救済信仰）にも投影されていよう。たとえばもっとも基本的なムラまつりのかたちは、年末年始の「農楽隊」の群行を迎えることから始まっている。それは仮面を着けたカミを伴うこともあり、まれびとの末裔、あるいはまれびとそのものでもある。むすめのイエにとってかよってくる婿はある種のまれびとだったともいえるのでは

ないか。現実にはただの酒飲みであったり、道楽者であるかもしれないのに、この民族の「婿」に対するイメージの膨らみは真に民俗的である。<sup>(9)</sup>

丈家に行く—このことばは以上のようなことを想起させるまことに独特な言い回しにおもえる。それはさておき、前項で男が「われらが・かみさん」といわないことを取り上げたが、こうした言語表現の背景には、あるいは、古代以来、一貫した「妻訪い」風の結婚習俗があるのかもしれない。妻の側が一つの共同体をなして、そこにソトから男がやってきて、男こそは「ウリ食口(家族)」とされる。これが基本である。そうであるならば、男がやがて、子供とともに「婦を将て帰家」したとき、「ウリ妻」といい表さないのはむしろ当然ともいえるであろう。

ちなみに、安和洞では、婦人たちの呼称に「〇〇村(の)ひと」という呼び方をするが、これまたよく婚姻の在り方を告げてくれていた。たとえば文相化氏の迎えた件のむすめは60近いおばさんになっても、ムラのなかでは「外洞テギ 외동떡이」と呼ばれていた。テギは「宅」の語からきたものであり、もし釜山出身の嫁なら「釜山宅」となる。地名だけでなく、たとえば金社長夫人のことを「金社長宅」ということもある。これは、都市に住む若い人にとってはすでに相当ひなびた表現らしく、こころみに尋ねてみると、「知ってはいるが、実生活では耳にしない」とこたえる者もいる。しかし、「宅」そのものはもともと尊称であり、「お宅」の意味でもよく使う。それが地名に付いて「夫人」を意味するというのはすこぶる古風である。元来はたとえば「釜山のお方」ぐらいのニュアンスだったのだとおもわれる。ただ同時に、こうした呼称が一生つきまとうのなら、嫁が夫の家では、「ウリ」のなかに入ってこないのは、これまた当然ということになるろう。

以上の連想は「深読み」にすぎるかもしれないが、いずれにしても「丈家に行く」は、この民族の言語文化を考えると、なかなか味わいのあることばだといえよう。

とはいえ、嫁の「<sup>シジブ</sup>婚家での<sup>ザ</sup>くらし<sup>リ</sup>し<sup>サ</sup>집살이」ということばには、一体に重苦しいイメージが付きまどっていた。シジブサリという語は今でもよく



使う日常語であるが、この捉え方そのものが、本来いるべきイエから離れて、別のイエにいるという自覚を伴っている。

これと一脈通じるのが「他郷ヒトキョウのくらしサリ타향살이」で、これは日本語の「出稼ぎ」よりもずっと哀切な感じを伴って歌謡曲などでもかつてはよくうたわれた。そこには現実にはけっこう楽しくしていても、いわばことばの呪縛というか、ウリ意識の及ばない所へきているという心意のもたらす作用というか、そんなものが働いているのであろう。

### 3. 土地にまつわることば

共同体の基盤はかつては「土地 ㅌ」であった。従って、共同体どうして争うときは、成員、個々人が対立するのではなく、土地がぶつかりあうことになる。それを端的に表すことばが「土地ト의 勢キ이 ㅌ세」である。実際の用法をみると、たとえば、70年代のこと、韓国からは南米に移民が多数いったが、かれらはそこのトッセに苦しみ、なかにはジプシーとなってみじめなくらしを強いられているとか、あるいは、「米国の夢」を抱いて渡米したものの、トッセに遭い、やむなく帰国したが、本国でも同胞のトッセに悩まされることになったとかいう言い方をする。日本語でいえば「縄張り」「シマ」意識に当たるだろうが、これを「土地」に関係付けて表現するところがおもしろい。

「ト」はただの土地ではなく、人が活動する所であり、敷地、土台の意味にもなる。日本でも、だれその縄張り、シマには手を出さない、などという語はあったし、またその意識はひそかに息づいているようだが、大方は社会の裏道を歩く人たちの特殊なことばになりつつある。しかし、〈トッセ〉はなかなかどうして逞しく息づいているようだ。1987年の大統領選挙以来、高潮して衰えを知らない、いわゆる「亡国的な地域感情」の根源はこのトッセにあるだろう。為政者あるいは野党の指導者が危機意識を持ったとき、かれらは「ト」にすがりついて、これを軸になりふりかまわず攻撃に出る。そして、現実の不合理、非道が「土地、地盤」と絡み付いて民衆の怒りを増幅する。従ってそれは、現実であると同時に観念なの

である。

ウリ意識、社会各層・各分野での親族用語の多用、土地・基盤とのかかわりで噴出するウリ意識の負のエネルギー、そんなことが以上のことから知られるであろう。そのことの是非はともかく、現在の朝鮮語は日本語と較べると、共同体とのかかわりを根強く保持している。このことを確認するためにも、以下、やはり日常語の世界から、背景の深い言い回しを取り出してみようとおもう。

#### 4. 心意にかかわることば

一般に日常語については格別の自覚はないものである。「おったまげる」が魂消る・魂消る、さらに「たまかぎる」「たまきはる」などの古語に由来すること、「たま」の用法はかつてはかなり広がったなどということ意識している日本人はそう多くはないだろう。

朝鮮語の語彙ではどうであろうか。実は日常なにげなく口にするこことばに、この「たまげる」と同じ発想のものがかなりある。ひとの躰からなものかがとび出る・発現するという一連の表現があり、これが根の深い靈魂観に基づくことは確実である。

まず日本語の「たまげる」と似たことばに「魂が出た 혼나다」がある。師に厳しく質問されて返事に窮した、事故で死にそこなった、山道で道に迷ったなどの状況で使うので日本語「たまげる」とは文脈が少し異なるが、魂が抜け出てしまうような体験ということであろう。これと対をなすのが「魂をささせる 혼내다」で、こちらは、こなまいきな相手、無礼な者に対してよく用いられる。そのばあい「魂をささせてやる 혼내 주겠다」という強い意志表現でいうので、原初においてはさながら黒呪術の効果があつたに違いない。

ホンは魂の音読みである。固有語ではノク 닳 という。ノクの用例では「ノクの抜けた人 닳 빠진 사람」「ノクのない人 닳 없는 사람」で呆然自失のさまにある人、「ノクを奪う 닳을 빼앗다」で感動の極まりなどを意味する。さらに「ノクトゥ리 닳두리」ということばも日常語といえよ

う。このことばは、元来巫女の口寄を意味する民俗語彙のひとつであるが、民衆の愚痴、嘆きの意味でもよく使われる。受験勉強とアメリカ文化で育った昨今の学生はさておき、年配の庶民ならたいがい知っていることばである。たとえば、ソウルでのこと、代々住んでいた土地が緑地帯に指定され、しかもそこに本来、違法のはずの高層アパートが建つことになったとかいう「騒ぎ」のなかで（後述）、八十になる老人が

「国会議員がカネもらってちゃっかりふところに入れたんだか、大統領の周りの者がはかりごとをしたんだか、まあそんな難しいことはわからんけど、とにかくなんだかんだとって、おれの土地を取ろうって算段じゃないかな。アクドイ奴らだ」といったというのが、こういうのをノクトゥリという（1991. 2. 8.）。

躰からとび出るものは魂だけではない。「怒りが出る 화 나다」もやはり発想は同じで、これは要するにハラがたつことを意味する。一方、「フエを出す나 화 내지마」といえば、我慢しろということである。「出る」「出す」を対にするものでは「考えが出る생 각나다」「考えを出す생각해 내다」があり、これはそれぞれ、思い出す、(いい考えを) 思いつぐの意味で盛んに用いられる。

さらに子供からおとなまで幅広く使う「シンが出る신나다」は、なにか好ましいこと、嬉しいこと、浮き浮きする雰囲気などのときに使われる。シンとはなんであろうか。いったん日本語の「興趣」に近いものと理解できるが、なおよくみていくと、上に述べた一連の靈魂観と共通するものだということがわかる。これは固有語と考える人が多い<sup>(10)</sup>。実際、李熙昇氏の『国語大辞典』においてもシンには対応する漢字を付けず、「いいことがあったり、またあることに興味と熱意が生じ、わくわくする思いになること」と記されている。

しかし、これは「<sup>シン</sup>神が出る」の意味であろう。ひとの躰、それも巫女の儀礼を踏まえると、脳天からノク、魂、<sup>ヘン</sup>神、<sup>シン</sup>これらが出入りするのであり、それぞれの名称は機能の違いを表すにすぎない。このことをより具体的に教えてくれるのが「モムサルが出た 몸살이 나다」である。けだる

く、到底気力が出ず、熱っぽいときに朝鮮語では間違いなくこう表現するはずであるが、モムサルとは<sup>モム</sup>軀にはいりこんだサルである。<sup>(11)</sup>サルはひとの運命を左右する悪気で、「乳のサル 젖살」はすなわち乳線炎であるし、また突然の死に対しては「急なサルに当たった <sup>급살맞았다</sup>」などともいう。これは<sup>오락치</sup>辱説ともなり、「<sup>급</sup>急サルにあたる<sup>마주</sup>べき<sup>인</sup>奴」といえば、日本語の「くたばりぞこないめ」とでもなろうか。少なくとも庶民の罵りであるからには、この語が古典文学などから借りてきた高級語彙であるはずがない。

モムサルと並んでやはり話ことばの一つといえるが、下痢腹のときによく「腹のタルが出た <sup>배탈이 났다</sup>」という。タルは巫女のとなえる巫歌にもみられることばである。悪気というよりは単に「さしさわるもの」ぐらいに理解されているが、もとは悪しきモノ、つまり「もののけ」だったのであろう。なおここで付言しておけば、「<sup>나</sup>出る」というとき、<sup>외</sup>軀の外へ出ていくだけではなく、<sup>내</sup>軀内に潜伏したものが<sup>발</sup>発現するという意味もある。サルやタルは発現であり、シンは軀の内外、ホンのばあいは外へ、ということになるだろう。

ところで軀にサルなどがはいりこんだとき、どうするのであろうか。日本では「たまふり」「たましずめ」ということが古代において行われた。このうち「たまふり」の語義をめぐるには必ずしも定見をみていないが、要するにたまを軀のなかに留め充実させるのか（折口信夫）、祓い鎮めるのか（反折口）ということである。ここはそれに深入りする場ではないが、朝鮮の民俗文化のばあいは、鬱積した悪気は「解くこと <sup>풀이</sup>」により解決される。<sup>(12)</sup>

サルのばあいは「サル프리 <sup>살풀이</sup>」であり、庶民のための相談役ともいうべき巫堂（巫女）によるサルプリ舞は今日、芸術家されて伝えられている。一方、1987年の大統領選挙のときのこと、全羅道では同地域出身の野党候補を熱狂的に支持したが、そのことに対して、理解する側の人は「ハン（恨）プリが一度は必要なんだ」といったものだ。ハンそのものが、一時的な怨恨ではなく、ことばにならぬ積もり積もった理不尽さへの、いかにも民衆的な表現なのであるが、ハンプリ（解冤）ということばもまたい

かにも民衆的な言い方ではある。

プリは動詞「解く풀다」に由来する名詞で、この動詞をさらに受け身にして「直星が解かれる 직성이 풀리다」という表現も使う。直星が人の運命に影響を与えるというのは道教的な星辰信仰に由来するのであろうが、庶民にとっては星そのものよりもそれが「解かれる」ことのほうに関心があるようだ。これは現在は「満足がいく」という意味合いで用いられる。たとえば次の記事はオリンピック以後に顕著に表れた過消費傾向に対してのものであるが、

「生活レジャーである海釣りにまで、数百万ドルのカネをつぎ込んで、釣り用のボートを買込み、それで釣ってこそ直星が解かれるとでもいうのか。」

と述べ、読者に向かって「精神を整えよう 정신을 차리자」といつている(1990.5.24)。

以上に述べたプリは日本の文化とも深くかかわるとおもわれる。これについては、先学三品彰英氏がすでに「布都之御魂考」で説いている<sup>(13)</sup>。日本の国語学、国文学のほうではあまりこれを受容していないようであるが、三品氏の説はもう一度みなおす必要がある。朝鮮の神事にはサルプリ、七星プリ、城主(家宅神)プリなど、プリの語を用いる儀礼が多く、また済州島では神がみの各種の本縁譯を「本プリ」といつている。しかも注意すべきことに文献では「風流」という語がさかんに出てきて、これがどうやら民俗的な「あそび」の漢字訳らしいのである。

これを踏まえると、日本の「風流」の根柢ももっと民俗世界のなかに遡及させるべきだということになる。ふりゅう・おふりゅう、また南島のフーリ・穂利祭<sup>ふり</sup>などの名で呼ばれる民俗行事を「風流」の変異と捉えただけで、ことすんだといつているわけにはいかないだろう。

華麗な服装と歌舞、鳴物入りの祝祭的雰囲気—日本の「ふりゅう」は一般にこのように特徴付けられるが、これは賽神の場<sup>まつ</sup>とまったく同じ世界である。三品氏がふりゅうは「朝鮮の 풀이(プリ)と同源の語」と主張したのは根拠があるというべきであろう。なお、これに付言すれば、朝鮮のプ

りと結びつけるためには、ここに「農楽」という民俗的なあそびを据えなければならぬ。それは農民たちの鳴物入りの華やかな練り歩きであり、同時に個々の家で、城主プリ、<sup>ツンジュ</sup>竈王（<sup>チュウツン</sup>竈神）プリなどの祭儀も行い、庭での演戯もみせるものである。<sup>(14)</sup>これを媒介にすれば、プリとふりゅうはより明らかに結びついてくるだろう。

## 5. 負の価値——罵りことば

朝鮮語の日常語を扱いながら、罵りの世界に触れていなければ、それは生命のない作りものでしかないだろう。朝鮮語では「罵<sup>マ</sup>りを喰らえば長生きする욕을 먹으면 오래살다」ともいう。「辱<sup>ヨク</sup>」は民衆の社交であり、価値観の尺度であり、農業生活の反映でもあった。

朝鮮語の罵りのなかでは血統への攻撃的な表現がまず目につく。これについてはかつて「辱説考」としてまとめたこともあるが、<sup>(15)</sup>要するに、「てめえのお母ちゃんとさかる野郎め」といった類いの罵りである。これは中国語でも盛んに使うのであるが、日本には広がらなかった。それはさておき、母親云々という言い方が効果を持つためには血統、家系への侮辱に重大な意味がなければならぬ。日本社会でも武士はイエのために腹まで切ったのだから、家系重視の伝統がないわけではないが、彼我、較べてみると、族譜という一族の系図を持つ社会とかばね無き社会の違いは相当に大きい。良い例が「雑」をめぐることばである。朝鮮民族にとって「雑種」はかなりの緊張を持つことばである。人により語感の差はあるだろうが、もし「朝鮮文化は日本文化と同じく雑<sup>チョプチュンナム</sup>種文化です」といったとしたら、おそらく猛烈な負の感情を引き起こすだろう。

農耕文化、騎馬民族文化、儒教、仏教、道教、それに「基督教」までもが入り交じっているのだから、日本文化論のひそみで「雑種」といえないかもしれないはずだが、価値観として雑種には抵抗があるのだ。たとえば「市井雑輩 시정잡배」とか「雑野郎（馬の骨）잡놈」ということばがある。日本語の「有象無象」に近いが、より差別的な含みがある。日本語でなら「雑輩でわるかったな」などと居直ることも可能だが、朝鮮語ではとうて

い無理だ。これなどはおもいきった軽蔑のことば以外のなにものでもない。それだけに、たとえば民衆の演じる仮面戯で雑輩の典型マルトゥギが主人の両班に向かって

「おまえのことをいうならな、かあちゃん一人に、とうちゃんは二人じゃねえか。片っぽうは南陽の洪さんがこしらえ、もう片っぽうは水原の白さんがこしらえたんだからな、それをおまえ、両班だなんて自慢しやがって」  
（「統営五広大」）

というとき、根源的な価値の転倒になるのである。実社会にはこうした両班の庶子が至るところにいただろうが、下僕が面と向かって主人を罵るなどということはあり得ないし、いってはならないことであった。

さて、家系への罵りと同時にもう一つ、特徴的な罵り方がある。それは農業生活を反映したことばである。全羅道の庶民がよく使う表現だが「この芽サガジ オムヌンノムのない野郎 **싹아지 없는 놈**」ということばがある。サガジは一般にはサクといわれるが、いずれも植物の芽の意味から転じて、見込み、前途などの意味でも使われる。たとえば民族の宿願「統一」について

サク（見込み）があるようでもあるし、また黄ばんでいる（見込みがない）ようでもあるし  
（1990.7.26）

などともいう。

罵りのことばは負の価値を表しているのだから、当然、正の価値もあり、この正負の尺度を重ねていくことでその社会の言語文化、あるいは社会そのものを理解することができるであろう。そんな意味では、「（芽が）黄ばんでいるようでもあるし（싹이）노란것 같기도 하고」のような言い方は面白い<sup>(16)</sup>。この類いの農に由来する表現は生臭い現実政治の局面に対してもよく使われる。たとえばこのごろ頻繁に使われるのは、田に水を引き込み耕すことを意味する農業用語「ムルガリ 물갈이」である。与野党いずれもどうも水が滞り、悪臭が漂っているということなのか、政治圏のムルガリ待望論が民衆のあいだにあり、MBCテレビがこれを反映して「MBCレポート政治のムルガリ」という題名の放送をしたところ、お上からお咎めを受けたとのことである（1991.1.21）。

あるいはまた「水口が開く물꼬가 트다」という言い方も好んで用いられる。これは、なにかのきっかけがつかめるという意味に転用されていて、たとえばこんな文がある。全羅道で国会議員の補闕選挙があったとき、平民党の総裁はなんと慶尚道出身の学者を候補に抜擢し、この人を威信をかけて応援し、当選させた。意表をついた戦略であった。学者出身の当選者は当選後にこう語った。

「金総裁の今度の決定は地域感情の被害者である、この地の住民たちをして、直接、地域感情打破の水口があげられる（＝きっかけがつかめる）ようにしようというものであった」

と（1990.11.10）。

## 6. 政治と造語－諷刺することば

以上、朝鮮語の日常語の世界からということで、イエ、土地、靈魂観、感情などにまつわることばを中心に瞥見してきたが、ここでぜひ項目を改めて述べなければならないのは「諷刺のことば」である。これまた罵りに劣らず卓抜で生命力に満ちたものが次々と生まれてくる感がある。紙幅の都合で一つだけ選んで記すことにする。

今年（1991年）の2月にはいって大きく浮上した政治醜聞の一つに「水西<sup>ス</sup>事件」というのがある。大統領府の文化・体育担当の次官、前政権のもとで急浮上した俄か財閥<sup>ハンギョ</sup>「韓宝」、国会の建設委員会、建設省、ソウル市などがカネの縁で密接に結ばれ、「芸術的な作品」を作りあげた。それは土地高騰のソウルに残された最後の緑地帯（開発制限区域）水西洞にアパート（日本のマンション）群を作り、中産層以上の余裕ある人びとに分譲しようという計画で、これが元来、成らぬ話なのに成ってしまった。そうしたところへ、マスコミの集中的な取材が始まり、話は政権の根本を揺るがすような大事件に発展した。

さて、この過程で新聞にはさまざまな批評、見出しが出されたが、ここでの主題「政治と造語」ということに限ると、この醜聞を「ウォターウエスト事件」と評したのがまずは卓抜だとおもわれた。ニクソンの〈ウォー



ターゲット〉をもじったものだ。そのころはといえばこうであろう。民衆にとっては、このワイロがらみの事件、300億ウォンとかいうとほうもないカネがもぐってしまった事件の出所は、「上ご一人」に違いないというのであろう。それが真実かどうかは知らないが、とにかく韓国民衆のこのばの鋭さにはたびたび感心させられる。そういえば、ウォーターウェストの語が紹介された件の記事の末尾には

「今、ちまたでは『台湾は日本の地、独島（竹島）はわれらが地、緑地は韓宝の地』といえざれ言さえ出回っている」

というのもあった。おもわず笑い、しかし、舌を巻かずにはいらなかった。

これと同時に、学生たちの政治造語もユーモアと力があって、まちがいに一つの時勢粧をなすのであるが、この事件に関しては、ソウル大学の「大字報」の見出し、水素爆弾ならぬ「水西爆弾」という表現がいかにも学生らしい命名だとおもわれた。一見して笑いと義憤がこみあげてくる。不発弾になる可能性をも含めたわけではなかろうが、いい得て妙である。

ただし、その後の経過をみると、幸か不幸か、この社会爆弾は完全に不発に終わった。

## 注

- (1) 気配り、気にする、気がきく、気がつく、気がすむ、気のせいなどは訳しにくい。
- (2) 『東亜日報』1990年10月9日付け。以下、日付だけのばあいはずべて同紙からの引用。
- (3) 「ロッテワールド」というかなり日本的な経営を行うサービス業の従業員を対象にした調査では、女子社員への呼称にも「○○○氏」を用いる上司が50.4%になるという。88年の調査では22.5%であったというから、男女平等の趨勢が浸透しつつあることは認められる（1990.11.17.）。
- (4) 妻を呼ぶことばには、「うちの者 우리 집사람」という言い方もあるが、一般には、「おれの／わたしの」を付してチョ（妻）처、アネ 아내、マヌラ（かみさん）마누라 などという。
- (5) 『韓国の発見 ソウル』チョン・ヤンワン氏執筆部分、65頁。1983年。
- (6) これと同じ意味で「丈家にはいる 장가 들다」という表現もよく使う。た

たとえば、『東亜日報』の一面コラムによると、中国東北地方延辺地区の同胞のむすめたちと韓国の「丈家には入れない」農村青年たちとの縁組がすでにいくつか進展していて、この動きは保健社会部（厚生省）が支援することになり、今後、促進されそうだとのことである。もちろん、これは手放しで喜ぶわけにはいかず、たとえば中国の都市ではふつう男が「丈家にはいる」のには2千元もの費用がかかるが、これが用意できないために結婚難が生じているのが実情だ。こうした状況では延辺の男性たちの結婚難を助長しかねず、ひいてはお互いのあいだに摩擦が起きかねないと結んでいる。（1991. 2. 18.）。

- (7) 崔在錫「韓国家族制度史」『韓国文化史大系Ⅳ』436-437頁、1970年。
- (8) 日本の「妻屋」の例は、『萬葉集』巻第三、死んだ妻を悲傷して高橋朝臣が作った長歌のなかに「吾妹子跡 おぎもこと 左宿之妻屋尔 さねしつまやに 朝庭 あしたには 出立偲 いでたしひ 夕尔波 ゆうべには  
いりるなほかひ 入居嘆曾…」とある（日本古典文学大系本）。
- (9) ちなみに、「婿は百年のお客 사위는 백년손 」という表現が民間には伝えられている。
- (10) なお角川版『朝鮮語大辞典』下巻1523頁でも固有語扱いで、「浮かれる（浮き浮きする）こと、調子にのること、いい調子（気分、気持ち、感じ）になること、得意（になること）」と記されている。
- (11) モムサルは新聞などの見出しでもよく用いられて、その場合は癒しがたい現象に対して比喩的に使うことが多い。たとえば、選挙にちなむ話題で、候補の統一ができないことを伝える見出しに「与 単一化、モムサル 無所属出馬も」とあった（1991. 3. 10.）。
- (12) 全羅道の巫俗では人のつらい思いは結ばおれをなすと考えていて、この救済は、白い帯の結び目を振りつつ解くこと（コップリ）で表現される。日本の「たまふり」も文字どおり振り動かすのであるが、それはこの意味なのではなからうか。
- (13) 三品彰英 『建国神話論考』 1937年。
- (14) 拙稿 「農楽の淵源と芸能性」『大系 日本歴史と芸能』第四巻 1991年。
- (15) 拙著 『仮面戯と放浪芸人』第一章 1985年。
- (16) 新芽の黄ばんでいることが、よくないことの前兆であることと、おそらく同じ発想であろう、韓国では病人を見舞うのに黄色の花を持参することは忌まれる。また近ごろでは甲花として黄色の花を飾ることも多いようである。いずれも発想の根は同根といえよう。